

文章教室の集まりの二次会でしよんべん横丁に行ったことがある。ずいぶん昔の話だ。近代化から取り残された戦後のどや街の名残だと聞いたので、どんなところだろうと興味津々。

その日は雪になりそうに寒い日で私は古い毛皮の外套を着ていた。

新宿西口からJRの線路に沿って行くと横丁のアーケードが見える。思ったより広範囲にどや街の様相を呈している。遠目にもそこは別世界の入口だ。

両側にはびっしりと間口二間位の店が並んでいる。私達五人は通路側に丸椅子がある店に腰を落ち着けた。カウンターには十五ほど椅子があり全部埋まっている。寒いので皆オーバーを着たままだ。

壁に貼ってある品書きを見て仲間が、

「焼き鳥は一本150円と書いてあるけど一本づつ頼めるの」

「はい、一本づつどうぞ」カウンターにいる二十歳くらいのおかっぱ頭の女の子が返事をした。

私達はトルコ料理を食べたばかりだった。

「私はねぎがいいわ」他の人も好きなものを言っている。

すると奥のほうから何か言う声が聞こえたと思うと、おかっぱの女の子が「5本で一人前なので5人前頼んでください」

「えー、5本なんて食べられないよ、一人3本づつにして」と仲間。

交渉は成立したようだ。お姉さんはネギの串刺しばかり焼こうとしている。私は「ねぎは私だけね」と言うと、奥にいた顔の四角い女がつかつかと寄り添ってきて「ネギネギってうるさいんだよ！ほらネギばかり焼いてやりな」

そう言うと奥に行き、客に向かって

「私も四十だから……」と言っている。

どうみても七十は過ぎていて。私は思わず隣りにいる仲間と顔を見合わせた。すると女がつかつかと私の前に立って、やおらコンパクトを取り出してばたばたやりながら

「わたし、いくつに見える？」

私、いちゃもんをつけられている！困った！

すると隣りに座っていた仲間が

「お姉さん、どうしたの、天花粉なんかつけちゃって」

すると、カウンターの客は皆大笑い。一件落着となった。